

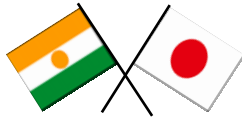
ニジェール支所便り

7月号

【編集長】中川企画調査員 【編集担当】佐々木企画調査員

Tel: (227) 2073 5569 Fax: (227) 2073 2985 E-mail: ni_oso_rep@jica.go.jp

6月のピックアップニュース！



6/18 イスフ・ニジェール共和国大統領訪日(～6/21)



元ニジェール隊員たち(後列)と田中 JICA 理事長(前列左)と
イスフ・ニジェール共和国大統領(前列右)

(http://www.jica.go.jp/information/official/2015/20150623_01.html)

野路職員の着任挨拶

暑い。ニジェールの首都ニアメに到着。飛行機のタラップを降りる時、灼熱の空気に体を包まれ、このまま昇華してしまおうで、思わず上着を着込んだ。

同時に、「また来てしまった。」と、苦笑い。ここは、アフリカ・サハラ砂漠の南方に位置する白キリンと無毛ヒツジと腕立て伏せするトカゲの国。そして旧知の仲間がいる国。

7年前にはじめてのアフリカ、ニジェールへ赴任した時は、言葉も生活習慣もわからず、とにかく毎日暑い。よく3年も過ごしたなと、つくづく自分に感心していますが、一方、過酷な土地ながら、振り返れば楽しかった記憶も沢山あります。特に協力隊員と一緒に過ごした時間は楽しい思い出の一つです。

その後、カンボジアで調達支援を数か月(現地職員と日本語で話せるのでびっくり)、セネガルで経理支援を3年間勤め帰国(セネガルは忙しかった)。地元北九州で3週間ほど五十肩の修理に専念し、今回再び、ニアメへとやってきました(テニスラケット持参)。今回は10月3日までの出張滞在です。業務はもちろん経理支援です。

繰り返しますが何処にいても暑い。一番暑い時期にやってきました。しかし、環境が厳しいほど逆に、ファイトが湧いてきます。もう一度60年度1次隊のころを思い出して、初心に帰り頑張りたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

(野路利男)

プロジェクト・専門家等の活動の進捗状況紹介

■■■サヘル地域における貯水池の有効活用と自律的コミュニティ開発プロジェクト(VRACS)■■■

<http://www.jica.go.jp/project/niger/001/index.html>

プロジェクトサイトのあるマラディ州では雨が降り始め、雨季作の準備が慌ただしく進んでいます。本原稿を作成している6月11日時点では、ニアメでは雨がぱらついた程度で、本格的には降っていません。今年は、雨の降るのが少し遅れているようです。

VRACS プロジェクトの各サイトでは、普及員、農民ファシリテーターが中心となり雨季作の準備を始めています。4月、5月は酷暑期であったため、一部のサイトでセッションの時間を短縮していましたが、今は気温が下がり、通常時間にセッションを行っています。

ニアメモデルサイトの一つである、Saga サイトでも、5月半ばより通常のセッションの時間に戻し、雨季作の準備作業をはじめ、毎回のセッションでは活発な議論が行われています。本サイトの担当普及員(女性)はセッションの前後に頻繁にプロジェクト事務所を訪問し、準備の確認や必要書類の作成を日本人専門家、普及・技術移転局の職員のアドバイスを受けながら行うなど、プロジェクトの活動に積極的に関わっています。

その効果があったのか、もともと内気であった彼女が、自信をもってセッション運営ができるようになってきました。あまり発言をしない人に発言を促す、メンバーに考える時間を作らせる、といったファシリテーションスキルの上達につながったようです。

事務所においては、「これは私の経験では無理・・・」と弱気な発言をすることもあります。普及技術移転局の職員や日本人専門家のアドバイスと励ましを受け、最終的には「やってみよう」と変わってきています。日本人専門家が頻繁に、直接指導できるモデルサイトのよい効果が出ていると思います。

Saga サイトは作付けそのものに失敗が無ければ、望ましい形のFFSの事例を見せるための、格好のサイトになる事が期待されます。このまま、メンバーと普及員がモチベーションを持ってFFS活動を継続し、収穫を迎えることができるよう、継続的に支援を行います。

(農業普及専門家 長井宏治)



日本人専門家、普及技術移転局職員の支援で、雨季作の活動計画を作成する普及員(真ん中の白い服、プロジェクト事務所にて)

ニアメ FFS モデルサイトを担当する普及員

VRACS はニアメ州において、Tondi Koirey と Saga という2地域で、FFS(Farmers' Field Schools)モデルサイトの活動を行っています。活動では農業事務所の普及員が、FFS ファシリテーターとしてセッションを運営しており、Tondi Koirey 地区においては、普及員のタイバさんが担当をしています。彼女はFFSファシリテーターを務めるのは初めてで、まだ不慣れな部分がありますが、活動に対するモチベーションは高く、また、現地メンバーとのやり取りが得意です。特にTondi Koirey のグループメンバーは全員が女性で、ディスカッションに火がつくと、皆が我を忘れて話だし、誰にも止められない状況に陥ることがあります。しかし、彼女であれば冷静に、時には情熱的に取り仕切り、皆をなだめることができます。

タイバさんはティラベリ州にある村で、農家の娘として育ちました。小さなころから農業を手伝っていましたが、降雨不足や害虫被害、土壌の劣化から作物の生長は悪く、年間を通じて、自給できる収穫を得られないことがよくあったそうです。家族が困っている中、彼女は「何か解決方法は無いのか。」と、よく考えるようになり、これを機に農業に関心を持つようになったそうです。そして、勉強をして農業省の試験を受けて合格し、7年前からニアメの農業事務所に普及員として勤め始めました。これまでに、World Vision における現況調査や Pana-Résilience という改良品種に関するプロジェクト等、様々なプロジェクトに参加して経験を積んできました。VRACS の FFS に対しても関心が高く、これからもどんどんプロジェクトに携わって学んでいき、いずれは農民の収穫向上につながるようにしたいと、意気込んでいました。



Tondi Korey にて FFS セッションを行っている様子
(一番右が普及員のタイバさん)

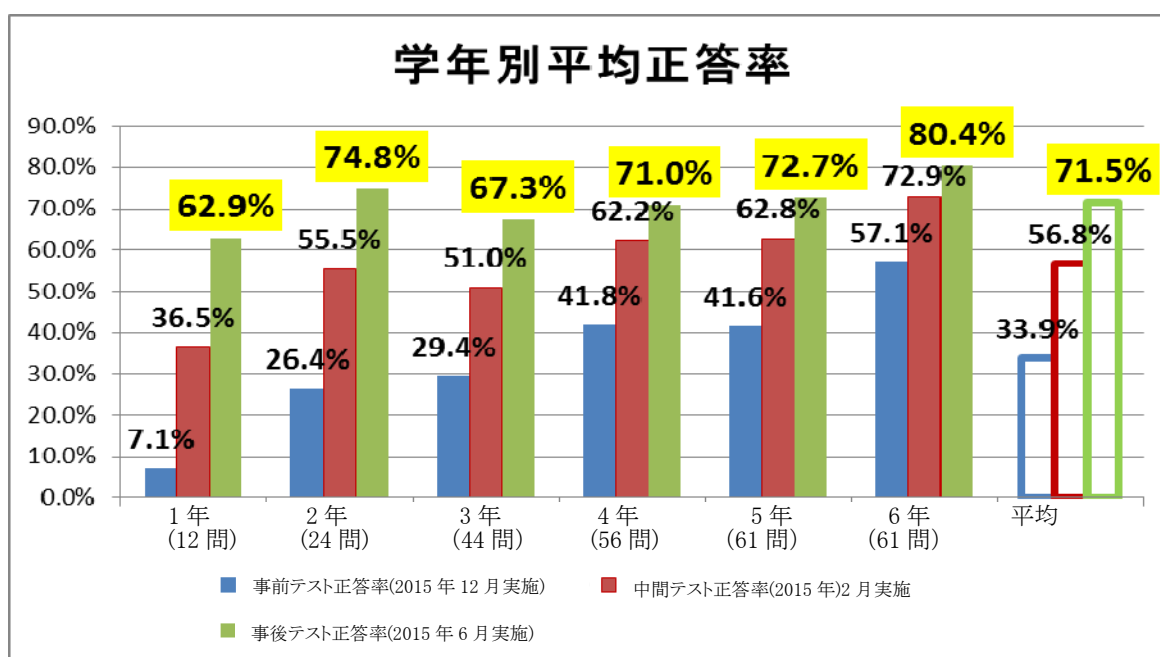
(業務調整/農業普及補助専門家 町 慶彦)

■■みんなの学校：住民参加を通じた教育開発プロジェクト(EPT III) ■■■

<http://www.jica.go.jp/project/niger/002/index.html>

『補助金モデル・質のミニマムパッケージ融合パイロット』活動の対象校では、保護者・住民への児童学力にかかる情報共有(学力テスト結果共有)によって住民意識を喚起し、コミュニティの参加と動員による校外活動としての算数ドリル活動が実施されてきました。その結果、学習時間の増加、児童への学習効果、通常授業への出席率の改善、学校とコミュニティの対話の増加、コミュニティの関心・理解の、児童の学習態度や教員意識の変化と様々な効果が報告されています。

そこで今月 6 月は 2014/2015 学年度末となることから、今年度の活動総括として、児童の学力変化を見るための事後テストを実施しました。その結果、39 対象校中事後テストを受けた 120 クラス中 118 クラスにて事前一事後間にて



平均点の上昇が見受けられました。全体的には、事前－中間－事後間にて全学年の平均点が上昇し、全学年平均 33.9%の正答率であったのが、約 5 ヶ月後の事後テストにおいては 71.5%にまで上昇。37.6%の正答率上昇へと繋がったことが確認されました。

(COGES 能力開発専門家 影山晃子)

ニジェール国内の出来事 ～ニアメを襲った大停電～

5 月末にニジェールの暑さもピークを迎えましたが、そんな折も折、ニアメ中の人々を苦しめる大停電が起こりました。一日数回、短時間の停電は常態化していたものの、5 月末の大停電は日中数時間かろうじて電気がくるのみで、特に夜間長時間の停電は人々を更に疲労の底に追いやるものでした。かくいう私も、連日長時間にわたる停電に快適な睡眠をすっかり奪われ、辛く長い夜を何とかやり過ごして、翌朝職場に向かうという毎日を送っておりました。ここにきてニジェールの洗礼を受けた感じです。このそもそもの原因は、ニジェールに供給される電気の 80%以上を隣国ナイジェリアから輸入していることに端を発しています。今回これだけ停電が長引いたのも、ナイジェリアの国内問題で発生したストライキの影響によるものでした。ナイジェリアのストライキが収束しない限り、ニジェールの安定的な電力供給は実現できないと言いつつ電力公社 NIGELEC の社長。「はい、そうですか」と納得できるわけもなく、それを聞いた現地スタッフも、怒りを通り過ぎて呆れ果てた様子でした。そんな情けない記事の後、目にしたのが「2020 年、ジブチの電力 100%自給を目指す」という記事。ジブチもニジェールと似たり寄つたりの状況で、電力の大半をお隣エチオピアに依存しているとのことですが、その現状から脱却すべき、使える自然エネルギーを総動員して完全自給を目標に掲げるという、夢のような計画です。たとえそれが絵に描いた餅に終わってしまったとしても、これくらいの気概をもってニジェールにも取り組んで欲しいものです。なぜならここには国中の人々を茹だらせるほどの自然エネルギー、太陽光が有り余っているのだから。

(佐々木企画調査員)